

表1. 記述統計量

	平均値	標準偏差	分析 N
移動	3.12	1.67	90
更衣	2.72	1.74	90
食事	3.92	1.31	90
整容	2.82	1.69	90
入浴	2.46	1.64	90
排泄	2.86	1.82	90

各ADL項目間の相関行列を表2に示す。

表2. 相関行列

	移動	更衣	食事	整容	入浴	排泄
移動	1.000	0.769	0.719	0.775	0.730	0.753
更衣	0.769	1.000	0.892	0.847	0.892	0.897
食事	0.719	0.892	1.000	0.737	0.832	0.874
整容	0.775	0.847	0.737	1.000	0.808	0.840
入浴	0.730	0.892	0.832	0.808	1.000	0.818
排泄	0.753	0.897	0.874	0.840	0.818	1.000

表が示す如く、各項目間相互の相関係数は0.674 ~ 0.897で高い正の相関を示している。更衣との相関では整容(0.847)、入浴(0.892)、排泄(0.897)、排泄との相関では整容(0.840)、入浴(0.818)、整容(0.840)、入浴との相関では整容(0.808)、と高い相関を示し特に更衣項目との相関が高かった。食事、移動に関しては前出の項目ほどは相関は高くなかった(0.639 ~ 0.769)が移動は更衣との相関が最も高く(0.769)食事は最も低く(0.719)、食事は整容との相関が最も高く(0.737)入浴と最も低かった(0.632)。

ハリマックス回転後の成分行列を表3に示し、成分プロットを図1に示す。

回転後の空間の成分プロット

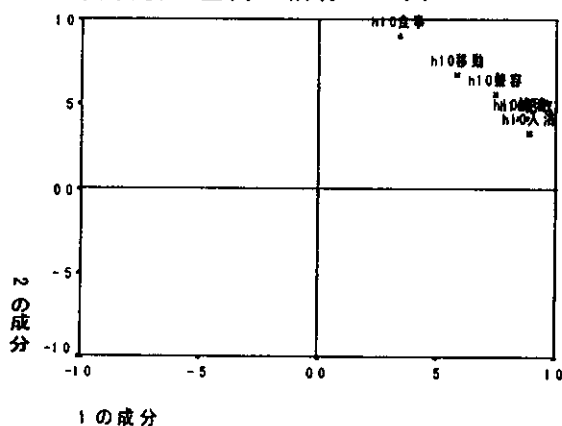


表3. 回転後成分行列

	1	2
移動	0.584	0.681
更衣	0.872	0.417
食事	0.337	0.909
整容	0.741	0.559
入浴	0.884	0.334
排泄	0.842	0.421

表3に示す如く第1成分の因子負荷量は高い順に入浴(0.884)、更衣(0.872)、排泄(0.842)、整容(0.741)が抽出され、第2成分の因子負荷量では食事(0.909)、移動(0.681)が抽出された。図1に示す如くADL項目のまとまりからは入浴・更衣・排泄・整容群と食事・移動群とに分類できる。

ステップワイズ法による重回帰分析の結果を表5に示し、検出された相関係数を表4に示す。

表4. 相関係数

	痴呆	移動	更衣	食事	整容	入浴	排泄
痴呆	1.000	-0.578	-0.725	-0.677	-0.787	-0.666	-0.657
移動	-0.578	1.000	0.769	0.719	0.775	0.730	0.753
更衣	-0.725	0.769	1.000	0.892	0.847	0.892	0.897
食事	-0.677	0.719	0.892	1.000	0.737	0.832	0.874
整容	-0.787	0.775	0.847	0.737	1.000	0.808	0.840
入浴	-0.666	0.730	0.892	0.832	0.808	1.000	0.818
排泄	-0.657	0.753	0.897	0.874	0.840	0.818	1.000

表4に示す如く、痴呆との相関では整容(-0.787)、更衣(-0.725)、ついで食事(-0.677)、入浴(-0.666)、排泄(-0.657)と比較的高い負の相関を示した。表4、表5からADL項目と痴呆との影響性を観ると整容・食事(R²=0.640)と高い寄与率を示した。

表5. 投入された変数または除去された変数

モデル	投入	除去	R	R ² 乗
1	整容	8.19	0.787	0.619
2	食事	8.64	0.800	0.640

D. 考察

前回、痴呆が重度化すれば精神・認知機能の低下に伴い、外界刺激に対する認知能力の低下、意欲低下、自己認識の低下が生じ、特に食事・整容行為のADL低下をきたす事は報告したが、今回の分析結果は痴呆進行度と更衣

・整容・排泄・入浴および食事との相互間に関連性が高い事を示している。従って更衣，整容，排泄，入浴項目，および食事項目の低下により痴呆の進行度が進む事を示唆する結果となった。痴呆と移動能力との関連性はその他のADL項目との関連性に比較すると低い相関を示しているが，前回報告した如く，痴呆を有さない群のADL能力低下は移動能力の低下に起因していると考えられ，移動項目は直接的には痴呆との相関性は低いものの，二次的にはその他のADL項目に影響し，前述のADL項目（特に更衣・整容・排泄・入浴）と痴呆との相互関連性の高さからすると多次元的に移動能力の低下が痴呆の進行，およびその他のADL能力の低下に影響すると思われる。

江口¹⁾らの在宅介護老人の研究において，起居移動動作非自立群では入浴，更衣，排泄，整容，食事の順で非自立例の頻度が高くなる事を報告している。これからも痴呆の進行度，ADL能力の低下の推測に関して，移動，食事を除くその他のADL項目の一括的評価の重要性，および移動，食事項目の独立性，特殊性の研究が今後必要である事が本研究により示唆された。

E. 引用文献

- 1)江口 清，大貫 稔，福屋 靖子，他：在宅要介護老人の地域に根ざしたリハビリテーションのための基礎研究．日本公衆衛生誌第 39 巻第 10 号，743-756,1992